関西自然保護機構会報16(2)：109－110，1994

巻頭言

川から学んだこと

奈良産業大学　御　勢　久右衛門

私の生家は，大和の吉野川畔にある。そこで70年近く，毎日川を眺めてくらしてきた。そのくらしのなかで，川から学んだいくつかのことを述べてみたい。

清冽で，豊かな水量を誇り，豊富な生物生産力をもつ吉野川は，1970年代のはじめ，高度経済成長にかげりがみられはじめた頃，新聞社や学校，それに川辺の住民から，ツルの幼鳥らしき鳥が吉野川畔でよくみかけるが何という鳥なのかと，問い合わせを何回か受けるようになった。確かめてみると，いずれもサギの仲間である。全身が純白で，その飛翔はいかにも優雅で，ツルを思わせる。もともと彼等は清冽な水域の住人ではない。田んぼのような富栄養化した水域に住みつく鳥たちである。田んぼの住人だったはずのサギ類が川辺でみられるということは，川岸にヘドロがたまり，田んぼに生息するような餌生物達が増加した証であることは間違いあるまい。

同じ頃，秋になると，川原一面に黄色い絨毯を敷きつめたようにセイタカアワダチソウが咲きほこり，春4月，本流に流れ込む支流や本流の岸辺に添ってナノハナによく似たセイヨウカラシナが年々勢力を拡大しはじめた。

『菜の花畑に入り日うすれ，見渡す山の端.....』は私達が小学生の頃に歌ったなつかしい唱歌の一節である。また，白いサギ類はツルに似て優雅で高貴にみえる鳥。川添いの住民たちは，これらを眺めて，清流吉野川の自然が再びもどってきたかのような錯覚におちいったようであった。

白い鳥，黄色い花は，水質の汚れを警告する指標生物として価値の高い生物群である。住民の一人一人が，身近な自然から，彼らが発する生物情報を五感を通じて的確に察知し，多くの住民が環境変化のモニターとなることが重要である。そのためには指標となる生物の調査と研究と開発につとめ，これらをもとにして提言や助言を積極的にすすめるべきではなかろうか。

川の汚染はその集水地域の人口増に比例して進行するといわれている。ところが，吉野川流域の人口は1940年代後半がピークで，その後次第に減少し，1960年代の後半には半減している。にもかかわらず，この頃から吉野川の汚染が進行をはじめた。流域で人口の多い市と町では，1965年に水道の施設が完備し，生活用水の利用が始まった（この流域では家庭用水が主である）。当時の生活用水の全利用量を1とすると，その後，5年毎の水の利用量は等差級数的に増加し，1975年の水道水利用全量は，水道施設が設置された当初に比べると約3倍となっている。水を利用するということは，水を汚して排出するということを忘れてはならない。

今夏の記録的な渇水で，一時ひかえめであったダム推進論がふたたび強まってきた。8月に一週間ばかり，四国・吉野川の上流域に設置された早明浦ダム湖から流出する濁水の調査に出かけてきた。ダム湖からの放水は茶褐色の濁水で，この濁りは，ダムサイトから阿波池田まで約60kmにも及んでいる。ダム設置以前の清冽な流れの面影は全く影をひそめ，この区間では子供達が泳いでいる光影は全くなく，釣人の姿もごくまばらであっ

た。

都市人口の一極集中，豊かなくらしへの志向社会のなかで，ダム建設の必要性を否定するつもりはないが，自然を破壊し，住んでいる人たちを追い出してつくったダム湖の有効な水資源の管理と環境の回復に活動の主点をおく提案は，新たなるダム建設の歯止めとなることは確かである。

大和と四国の吉野川の集水域の森林を比べてみると，四国の場合は，植林されてない荒れた土地や，植林後手入れの行きとどいていない山林，その上大型の崩壊地が目立つ。これはダムで村が水没し，生活の場を失った若者たちが都会へ流出し，山村を衰退させた結果であろう。これでは緑のダムとよばれる森林の保水力は弱まり，濁水の原因を招くことは確かである。一方，今夏の渇水体験をもとに，水の需要を増えるにまかせ，ダムづくりを続けるのではなく，水は有限であるという視点から，節水の施策など，自然と調和のとれた水の使い方などについて，自然保護機構は進んで提言と助言をなすべきではなかろうか。

近年，ダム等河川工作物設置にともなう漁業等への環境影響予測が各地で行われてきた。その資料に基づいて，魚のすみよい河川への改修，魚類増殖のための施設等をふくめた補償が行われている。

漁業等の補償の初期の段階では，環境影響予測等の資料は殆どなく，施行者と漁協や地元民との話し合いによって解決をはかってきた。調査に若干なりとも生態学的手法を用いた最初の報告書は，1958年に吉野川支流の津風呂ダム建設工事にともなう濁水の吉野川の生物に対する影響調査であろう。その後，各地のダム等河川工作物設置にともなう漁業等への影響予測には，生態学的基準は無いまでも，以前にもまして生態学的手法を拡大し，定性的から定量的予測へと進み，その河川のもつ生物群集の生産力の価値等の損失をふくめた環境影響予測の方向へと進んでいる。が，特に工事完了後の環境影響予測および評価についてはその論拠に乏しいものが多い。

この理由については，一般に環境影響予測および評価がおこなわれ，それに対しての補償が終わり，工事が完了すると，その後の影響調査が行われないのが通例である。その欠落点をおぎない，より適正な環境アセスメントを行うためには，工事完了後のアフターケアを徹底的に行い，環境影響予測および評価の可否を検証することによって，はじめて的確な環境影響予測と評価が可能となると考える。